

テーマ

悲—人間、
この恐ろしき者よ—

第19回

非戦・平和展



「御幸橋より 波に漂う屍」

石田 菜々子 作

広島平和記念資料館 所蔵

開催にあたって 悲 一人間、この恐ろしき者よ

今年度の法要は、かつて戦没者追弔会として勤められていた法要に、1987年、「全」と「法」の字を付して「全戦没者追弔法会」としてから、三十三回目を迎えます。この二文字には、多くの国の人々に計り知れない苦痛をもたらした私たち宗門の罪責と、戦地のみならず、自らの国も焦土にした戦争の悲惨さを忘れず、身に刻む願いが託されています。この法要では、国の違い、軍人・民間人などの立場の違いを問わず、戦没者一人ひとりと向き合い、その呻き^{うめ}を聞くことを大切にしていきたいと思います。

平和の保持のためには不斷の努力が求められます。その人間の努力や叡知^{うめ}の営みが尊いことは言うまでもありません。しかしながら、努力する「人間」そのものが問われない限り、私たちは自己絶対化の内に再び争いを生み出す危うさをもっています。戦争中のみならず、人間の日常がいかに恐ろしく信じがたきものであるか。そのような人間性の表出の最も悲しむべき姿が戦争ではないでしょうか。そして、知性の粹^{すい}である科学技術が、原子力による悲劇を生んできたことは、それがいかに深い闇をはらんでいるかを物語っています。

また、人間の暴力が剥き出しとなり、分断を日常化させ、それが世界各地に民族紛争を生むなど、目を覆うような状態となっているのが今日の社会状況です。実は、一人ひとりがその人間の恐ろしさを肌身で感じ、奥底^{おそ}に畏れを抱えて生きているのではないのでしょうか。畏れゆえに、自らを守ろうとする心から作り出される他者との分断、排他性や攻撃性、安全保障の名のもとにおける軍備の増強はとどまることを知りません。

それらの事実は、人間性そのものの問題を見過ぎて、自己の知性を疑わない私たちの愚かさを照らし出しています。正しいものでなければ見捨てられる、攻撃されるという畏れと不信がある一方、本当は強さや正しさで守らなくても、弱さは弱さのままて安心して生きられる世界を求めていることを見失っているのです。

その愚かさに対する深き淵^ひからの「悲」^{あら}(非ずの心)の声が、戦没者が遺した言葉や沈黙ではないのでしょうか。死者^{とぶら}を訪い、その声なき声に耳をすますことで、争いを作り出す機縁となっている自己自身にかけられた「悲」の心を聞きとっていきたいと思います。

『無量寿経』下巻の五悪段には、私たちの悪の深さが記されるとともに、それに対する仏の「痛み言うべからず(言い表せないほど痛ましい)」という言葉が繰り返されています。それは、自己の知性ばかりをたのみとし、人間の悪を見過ごすことで悲惨な状況を深めている私たちに対して、繰り返し説かずにはいられなかった仏の大悲の言葉なのでしょう。

この法要は、戦没者の「悲」と、仏から私たちにかけて「悲」を受けて、人間の恐ろしさ、それを見過ぎてしまう愚かさ、それらに対する畏れにより再び生み出される暴力の罪を、私たちが深く知らされていくことを願いとしております。その「悲」の心によりおこされた、争いのない国土への願いが、『無量寿経』では阿弥陀仏の本願として表されています。その願いに尋ね、私たちの内に懺悔が生まれることにより、阿弥陀仏の本願の浄土を求めずにいられない生き方が始まることを願いいたします。

皆さまのご参拝をお待ちしております。

2019年4月2日

真宗大谷派(東本願寺)宗務総長 但馬 弘

本展の開催にあたり、所蔵者をはじめ、関係諸機関、関係諸氏のご協力、ご助言に加え、展示協力をいただきました。ここに記して、心より御礼申し上げます。(順不同・敬称略)

広島市立基町高等学校
広島県平和記念資料館
広島別院明信院
山陽教区明泉寺

長浜教区慶福寺
山陽教区
長崎教区
泉原寛康

谷川修眞
玉光順正

なお、本展における資料、写真等、許可なく転載、複写することを禁じます。

あの日のヒロシマを描き継ぐ「原爆の絵」

被爆体験証言者と高校生の共同制作

1945年8月6日8時15分、広島に投下された原子爆弾。今回、展示されている絵画は、広島で実際に起きた光景が描かれています。この絵を描いたのは、被爆の体験をした証言者と広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの生徒たちです。

広島平和記念資料館からの依頼を受けて、証言者が語る当時の光景を、高校生が絵に描く活動が、2007年から取り組まれています。証言者と高校生が共同で取り組む「原爆の絵」は、戦争の悲惨さや恐ろしさを、私たちに鮮明に伝えてくれます。そこには、思い出すのも辛い体験を語る証言者の決意と、その話を聞き現実と向き合うことで苦しい思いを懐きながらも、それを伝えたいという高校生の意志がありました。だからこそ、その絵画は、時代をこえて、原爆とは何か、戦争とは何か、平和とは何かと呼びかけてくるように思います。それこそが、戦争でいのち奪われた方々の声なき声ではないでしょうか。



「閃光」

李 鐘根 被爆体験証言者

曾根 沙也佳 70回生

油彩画 F15号 平成29(2017)年度制作

描いた場面の説明

猿猴川にかかる荒神橋に入ったその時、突然空に黄色みがかった光線が2、3秒間漂っていた。(爆心地から約1.8kmの地点)

生徒のコメント

李さんの視界を染めた、黄色がかった閃光は、何度も何度も色を塗り重ねて描きました。見たことがない色を想像して、李さんの記憶と擦り合わせながら、当時の光景に近づけることは簡単なことではありませんでしたが、この絵を制作することで、私自身の平和についての考え方が大きく変わりました。

もし私がこの絵を描いていなければ、原子爆弾の閃光が黄色がかったことも、「原爆被害」が一言ではくれないということも、知ることができなかったと思います。

原爆の記憶が失われてしまうのは、本当に恐ろしいことです。この「閃光」を、もう誰も見ることがないように、私はこれからも行動し、伝え続けていきたいです。

被爆体験証言者のコメント

まず、曾根沙也佳さんにありがとうございます。自分にも描けない原子爆弾の閃光を描いてくださいとお願いしました。何度も打ち合わせをする、何度も描き直す。すまないと思いながら頼んでいました。

今日、絵を見せていただき、出来た、これだと思いました。苦しい時もあったと思います。良く耐えてくださったことと思います。心からお礼を申し上げます。嬉しいです。



「死んだ我が子を背負う若いお母さん」

岸田 弘子 被爆体験証言者

津村 果奈 68回生

油彩画 F15号 平成27(2015)年度制作

描いた場面の説明

避難の列の中に、若いお母さんがおられました。血まみれの顔で、誰が見ても既に死んでいる子どもを背負ってい

るのです。「誰か、この子にママ(ご飯)食べさせてください。水を飲ませてやってください」と一人ひとりにすがります。

でも誰にもどうしてあげることもできません。自分のことを守ることで精一杯だったのです。

生徒のコメント

昨年描かせていただいた原爆の絵の中にも、母親と赤ちゃんのいる場面があり、その絵では「亡くなった母親にすがりつく赤ちゃん」を描きました。今回の絵では、それとは反対に「亡くなった赤ちゃんを連れた母親」を描かせていただきました。2枚の絵の親子はどちらも、一瞬にして起きた相手の死を受け入れることができない状態でいます。

この絵を描いて、何の罪もないたくさんの親子もまた原爆の犠牲になったということを改めて知り、深い絆で結ばれた仲を一瞬にして奪った原子爆弾への怒りを覚えました。もう二度と、このような悲しい光景を生んではならないと強く思います。

被爆体験証言者のコメント

この若いお母さんの声なき叫びが聞こえます。「目を覚ましてよ。起きてよ」と私の心が痛み続けています。二度とこのような苦しみは許してはなりません。

「原爆の絵」の作品を通して、生命の尊厳、真の平和とは何か?あらためて考える機会となりました。

凄い作品にさせていただき、誠にありがとうございました。



「母との再会」

豊永 恵三郎 被爆体験証言者

岸 まりも 71回生

油彩画 F15号 平成29(2017)年度制作

描いた場面の説明

原爆が投下された時、家とは10km離れた坂の町にいた豊永さんは、母親と弟を探していた。二葉山に行った際、

弟を先に見つけ、弟が「母親はこの人だ」と指さした場面。

生徒のコメント

被爆されて服がびりびりに破れていたり、肌の色が変色していたりなど、実際に見ないと分からないことを、豊永さんからお話を聞いて再現するのが難しかったです。

今まで、平和学習として、平和について考えることはありましたが、ただ考えるだけの自己満足だったので、基町高校で実際に絵を描いた、それを次世代へとつなげる活動ができて本当に良かったです。

描くのは想像以上に苦しかったですが、月日が経ち、被爆された方が少なくなっている今、実際に被爆された方からお話を聞いて絵を描いて残すという貴重な体験ができたので、今後はこの経験が生かせるような作品作りをしたいです。

被爆体験証言者のコメント

何度も会って、被爆時のことを話したのを、よく聞いてもらいました。

私たち被爆者はいつまでも生きてはいないので、皆さんに、戦争のない、核のない世界となるように力を尽くしていただきたいと思います。



「御幸橋より 波に漂う屍」

河野 キヨ美 被爆体験証言者
石田 菜々子 69回生

油彩画 F15号 平成28(2016)年度制作

描いた場面の説明

芸備線矢賀駅より入市。たくさんの死体を跨いで歩い

た。比治山橋の両側に、川から引き揚げた死体がずらりと並び、藁がかけてあった。藁の下からは呻き声や「水をください」という声がしていた。

姉の勤める日赤病院内は大勢の血まみれの怪我人がのたうち回り阿鼻地獄だった。宇品の姉を探すために渡った御幸橋から見る川面には、俯いたり、仰向いたりした水死体がたくさん波にゆらゆらと漂っていて、物言わぬ人々の酷い哀れな姿は、今も眼に焼き付いている。

生徒のコメント

川に漂う死体というのは、当たり前ですが見たことがないので、絵を描いている際に想像した時は、正直恐ろしいと思いました。その恐ろしいと思った光景が、約70年前には実際に存在していたと考えた時、頭がついていけなくなりました。

この絵を通して少しでも「原爆」について深く考えていただけたら嬉しいです。

被爆体験証言者のコメント

日々の学習のかたわら、大変な作業をしていただきありがとうございました。石田さんには私の申し入れを忠実に表現してくださり、予想以上の作品になりました。

石田さんの努力と先生のご指導に心から尊敬し、感謝申し上げます。



「非常トラック(男性優先)」

池田 精子 被爆体験証言者
立川 侑子 61回生

油彩画 F15号 平成19(2007)年度制作

描いた場面の説明

原爆投下後の広島市内。海田町の病院へ向かう途中のトラックに負傷者が乗せられている様子を描いた。戦場へ兵士として送られる男性が優先的に病院に運ばれ治療を受けたため、老人や女性、子どもさえもトラックに乗せてもらえず、トラックの周りに人が群がり、大騒ぎになったという。

生徒のコメント

戦争のために全てを捧げ、そのために多くのものを失った時代。その苦痛に耐え生き延びた人の話を聞くということは、少しためらいがあり、また責任が重いものだと思います。しかし、語り継ぐことが戦争廃止と平和維持のために私たちができる手段の一つである。

兵士として戦場に行ったという話を祖父から聞いたことがある。戦場で生死の境に立った祖父は、今でも当時のことが頭から離れないと言う。私は絵を通じて見てくれるみなさんに戦争の恐ろしさをしっかりと理解してもらいたいと思う。

制作中、負傷した人とその人を運んでいる兵士の肌の様子を苦労した。原爆によって肌の表面がはがれて全身真っ赤になった人もいれば、黒くくすんだ赤い血の塊のできた人などを描き分けするのが難しかった。

被爆体験証言者のコメント

原爆を知らない立川さんが当時の話だけで描くのは大変難しいと思っていたが、出来上がった作品を見て、素晴らしい出来だと思った。悲惨な情景が走馬灯のようによみがえり、二度と戦争があってはならない、人類の滅亡につながる核兵器を廃絶しなければいけないとの思いを強く感じた。立川さん、本当に素晴らしい絵をありがとう。



「ヒロシマの最も長い夜 (地獄の炎ときのご雲の残塊)」

中西 巖 被爆体験証言者
河元 愛香 71回生

油彩画 F15号 平成29(2017)年度制作

描いた場面の説明

当時15歳だった中西さんは、向洋の自宅付近の森に避難して一夜を過ごされました。午後8時頃になっても赤い炎に染まった広島市内上空では、きのご雲が真っ白に盛り上がり、その中には稲妻が光っていました。夢のような光景

でしたが、数万人の方々が亡くなった、痛ましい、長い夜だったのです。

生徒のコメント

遠くから見たヒロシマの絵を描くに当たり、遺体や瓦礫などの直接的な表現ではない中で、どうすれば静かな景色の中に恐ろしさを込められるのかと悩みました。そして、できるだけ炎の中で起きた悲惨な出来事や、きのご雲の下にいた人々について知り、思いを込めて描くようにしました。

原爆の絵を描かせていただいて、今を楽しく生きるだけでなく、辛い過去から目を背けず、未来へ伝え続けていくことが平和に繋がるのだと思いました。昔の辛い記憶を伝えてくださった中西さんに心から感謝します。

被爆体験証言者のコメント

多くの生徒さんが痛ましい場面を直接描いておられる中で、あえて遠景をイメージしていただく、難しいお願いをしたのにもかかわらず、自ら現地を視察されるなど、懸命に取り組んでくださる様子に感動いたしました。

核兵器廃絶の道が険しい中で、熱心に質問などされる生徒さんの澄んだ瞳は、ヒバクシャにとりまして、希望の星でございます。これからのご活躍を心からお祈りいたします。ありがとうございました。



「被爆した馬」

李 鐘根 被爆体験証言者
桂木 晋作 71回生

油彩画 F15号 平成29(2017)年度制作

描いた場面の説明

夕方4時頃に見た、広島大学の塀が爆風で倒れて、その瞬間に馬の口から爆風が入り、目の玉が飛び出している様子。

生徒のコメント

証言者の方の見た景色と自分が想像していることは、違うことも多く、打ち合わせの度に勘違いをしていたりして、話を聞いて描くことの難しさを感じました。また、証言者の方に話が伝わりやすいように馬の模型を作って構図や色を確認したり、普段の制作ではしないような工夫をすることができました。

これからの生活の中で、また、広島を離れた時に、原爆の絵を通して感じたことや、知識などを知ってもらいたいと思います。

被爆体験証言者のコメント

桂木晋作君、ありがとうね。馬が大好きだと言っていたように、立派に描けました。何度も描いては消し、注文を付けていましたね。私が訪問するときには、いつも二人で迎えてくれました。心からお礼を申します。嬉しいです。



「吹き出物の治療」

笠岡 貞江 被爆体験証言者

富士原 芽依 71 回生

油彩画 F15 号 平成29(2017)年度制作

描いた場面の説明

被爆時、ガラスで怪我をしました。ガラス傷が治り、翌年に体のあちこちに吹き出物ができました。その傷口から膿^{うみ}が出ず、右腕に3つの穴があき、そこから膿がどんどん出ました。治るのに4カ月以上かかりました。

放射線のことは知らなかったので、お祖母さんが、毒ガ

スが出たネ、と言いました。原爆の後遺症だと思います。薬はなく、どくだみ(薬草)をもんだ汁を付けたり、干したものをお茶にして飲みました。

生徒のコメント

被爆から1年後に起きた体の異変。70年以上たった今でも腕に残る傷跡。制作を通して、あまりにも長期的な原爆の被害に核兵器の恐ろしさを生々しく感じました。腕に穴があき、そこから膿が流れ出している様子は想像しづらく、打ち合わせで何度もお話を聞き、修正を繰り返して、笠岡さんの記憶に近づけるように描きました。

こんなに痛々しく、悲しい出来事がもう二度と起こらないように、核兵器のない世界を願います。

被爆体験証言者のコメント

身体にできた吹き出物をどくだみで治療した。説明しても、現在では想像もつかない状態、治療方法です。

当初のデッサンでの下書きの時も、大まかな話で難しかったと思います。「こうでしょうか?」それではない。「これでは?」そうです。など、何度も描き直してもらいました。

証言をするときに、相手に分かってもらえる絵になりました。ありがとうございました。



「焼却を待つ死体」

新宅 勝文 被爆体験証言者

原 望美 61 回生

油彩画 F15 号 平成20(2008)年度制作

描いた場面の説明

原爆が落とされた翌日の朝、原爆によって亡くなれたたくさんの人々が整然と積み上げられた光景に出くわした。

山の様に積み上げられていたのではなく、一段一段丁寧に積み上げられていた。

生徒のコメント

今まで私が知っていた原爆直後の光景が、新宅さんのお話とは色々と異なることに驚きました。原爆の体験も人それぞれだったという当たり前のことに気が付かず驚いてしまった自分が恥ずかしかったです。

私が描いたあの死体の積み方は、大勢の人を一度に火葬するための積み方だそうです。そのような積み方をしなければならぬほど多くの人々が亡くなったのだという事実を知り、とても悲しく思いました。

被爆体験証言者のコメント

多くの死体は、山積みでは焼けないのです。絵に描かれている状況で焼かれるのです。私は、焼かれる状況を見ていました。



「お寺を襲った炎の竜巻」

國分 良徳 被爆体験証言者
今村 遥香 69 回生

油彩画 F15号 平成27(2015)年度制作

描いた場面の説明

河原の土手から國分さんとお父さんがお寺の方を見ると、寺も神社も、イチヨウ、クスノキ等の森が一体になり、火災が竜巻になり、天に吸い込まれている様子を絵にしました。

た。二人はその後、河原に戻って、寝転んで休んでいました。

生徒のコメント

「炎の竜巻」が難しかったです。観たこともないものを「描く」というより、「雰囲気」作りが一番大変でした。資料を探してもピンとくるものがなく、國分さんが見た様な情景にするのに、すごく時間がかかりました。原爆の悲惨さを絵で表現するのに、どれだけの知識と技術が必要か、改めて考えさせられました。

被爆体験証言者のコメント

一年生の時から、画に取り組んでもらって、大変だったと思います。



「家族を火葬する人たち」

浅野 温生 被爆体験証言者
亀高 菜那 70 回生

油彩画 F15号 平成28(2016)年度制作

描いた場面の説明

皆実町の被服支廠^{ひふくししょう}近くの蓮田のほとり、やっと見つけたわが子の死体を、道路わきで火葬にする遺族。原爆直後、

お坊さんも寺も火葬場もなかった。(爆心地から2.5キロメートルの場所)

生徒のコメント

この絵は、原爆によって亡くなった家族を遺族が火葬している場面なのですが、私は実際に家族を火葬するという経験をしたことがないので、家族を焼く人の悲しみや、原爆で家族を失ったことへの悔しさ、また、そういう状況に置かれた人はどのような表情をするのかといったことを想像するのに苦労しました。

悩んだこと、苦しんだことはたくさんありましたが、今は広島で生きる人間として「原爆の絵」の制作に関わることができて良かったと思っています。

被爆体験証言者のコメント

72年も前の歴史みたいな話なので、言葉で伝える難しさを実感しました。地獄絵の様な体験は、当時の時代、色、死臭、火傷ではみ出した内臓が、焼けトタンの上で、ポコンポコンと煮えている音など説明しても、画像化するのは制作する諸君にとっても難しかったと思う。

インタビュー あの日ヒロシマを描き継ぐ「原爆の絵」

全戦没者追弔法会プロジェクトでは「原爆の絵」の制作現場取材しました。自らの被爆体験を証言される笠岡貞江さん、また証言を聞き取り絵を描く、基町高校2年生の岸まりもさんと河元愛香さんにお話をうかがいました。

また、2018年12月16日に広島国際会議場において開催された展示会「次世代と描く原爆の絵」に訪れて「原爆の絵」制作に取り組む思いを担当教員の橋本一貫先生に伺いました。絵画を描いた高校生によるギャラリートークでは、基町高校3年生の曾根沙也佳さん、2年生の桂木晋作さん、卒業生の石田菜々子さんが、原爆の絵を通して伝えたいことなどを話されました。

証言活動の中で

Q. 体験者が少なくなっている現状をどのように思われますか



笠岡貞江さん

笠岡さん：年をとり、証言者は段々と少なくなっています。そこで広島市は、証言を伝承する制度を作り、伝承者を育てています。絶えることなく、世の中に訴えていけるのではないかなと思います。

Q. 次世代に何を伝えたいですか

笠岡さん：私は、証言活動の最後に慰霊碑の話をするんです。慰霊碑には「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませんから」と刻まれ、ここに30数万人の原爆の犠牲になった人が納まっている。こういうことは二度とあってはいけません。もしそうになったら世界はなくなるよ。みんなで考えようね、と話をしております。

証言者から高校生へのバトン

Q. なぜ、「原爆の絵」を描こうと思ったのでしょうか

岸さん：平和のために自分が何をすればいいのかもよくわからなかったんですけど、「原爆の絵」は、証言者の方と絵を通してつながり、つなげていくことができると思い、活動を始めました。

河元さん：被爆者の方々も高齢化によって、直接見たものを伝えてくださることが困難な現状の中で、私たちが直接話を聞けるのは、今、自分



岸まりもさん

しかできないという思いがありました。また、私は絵が好き

で、そのことが証言活動をしている方々の役に立てることはうれしいことだと思い、取り組んでいます。

Q. 最も心が動いた瞬間は

岸さん：一人ひとりのけがの状態を細かく描きながら、その人の置かれた状況を想像していくと、その人にも人生があり夢もあって、それが一瞬で奪われてしまったということであらためて感じたとき、一番苦しかったです。

河元さん：どれだけうまく描けたとしても、証言者さんの伝えたいことを考えないと人に伝えることができない。映像をみたり話を聞いたりしたんですが、衝撃的な内容に苦しくなることもありました。だけど、私の絵を見た人たちの感想を聞いて、私の描いた絵が人の心を動かし、証言者さんの思いを伝える手伝いができたことがうれしかったです。あと、同世代の修学旅行生に絵を見せると、初対面の人も興味をもって質問してくれて、私の描いた絵を通して伝えていく喜びがありました。



河元愛香さん

Q. 絵を通じて伝えたいことは

岸さん：戦争は実際にあった。原爆が落とされて、家族をなくして、孤独や悲しい苦しいという思いをした人たちが、実際にいたんだということを知ってもらいたいです。そして、このことは繰り返されてはならない。

河元さん：戦争は人の心を変える。戦争中は人を吊ったり心配するような気持ちの余裕がないくらいの状態で、今この瞬間にもどこかの国で、戦争や人身売買などが起こっている。70年以上前の戦争のように、人のことを心配する余裕のなくなった心の人たちが、今もまだいるということを伝えたいです。

取り組みを通して

Q. 指導の中で気をつけられていることは



橋本一貫先生

橋本先生：生徒が一番大事な部分なので、重荷になって疲弊しないようにということは気を配っています。あとは、生徒自身が達成感をもつことが、後につながる大きな要素になると思うので、描いてもらう以上は、本人が満足していく絵に仕上がっていくことが大事かと思っています。

Q. なぜ、「原爆の絵」の活動に取り組まれているのですか

橋本先生：悲惨な出来事を高校生に描かせるという点で批判的な部分もあるんですが、逆に柔軟な部分をもっている高校生だから描けるということもあるんです。取り組みの過程で証言者の方々と会話を重ねながら、生徒自身が育っていくことが大きな成果だと思っています。

「原爆の絵」は、当事者から話を繰り返し聞くことで何とかできあがっています。印刷された文章を読んで描けるかといえば、まず無理だと思います。そういうことができるのも、あとわずかな時間しか残されていません。将来、自分にできることで、何らかの形で平和や反戦ということに関わっていきたいという子が一人でも増えてくれればと思います。そういう取り組みを直接やるかやらないかだけでなく、意識の中にそういう心を持っているかどうかが大きいです。

絵画に込めた思い

Q. なぜ、「原爆の絵」を描こうと思ったのでしょうか



石田菜々子さん

石田さん：多くの人にいろんな場面を知ってほしい。体験した人たちには、それぞれに違う印象に残った場面があって、それぞれに悔しいとか怖いという強い思いがあることが分かったので、より

多くの被爆者の方の思いを残したいと思いました。

Q. 印象に残ったことは

石田さん：最後は「水をください」と、川や防火用水に飛び込んだ人がいたそうなので、水が飲みたい、熱さから逃れたい一心だったと思います。同じ人間がそのような地獄を作り出していると考えると怖いですし、それも自分たちが今いる足元で起こったことを考えると、ふと我に返っ

た時に怖いです。

曾根さん：絵に描いた部分というのは、原子爆弾が炸裂したときの異常な色の閃光を描いたんですけど、この絵をきっかけに、絵の外の話（在日朝鮮韓国人としての差別など）を聞きました。自分の絵は、けがをした人など、直接的ではないからこそ、苦しさ、怖さ、つらさということを伝えたいと思いました。原爆が落ちた時やけがした人といった一場面ではなく、人の生きた流れの中で原子爆弾の恐ろしさを知れたことは大きなことだったと思います。



曾根 沙也佳さん

Q. 絵を描いて、気持ちの変化はありましたか

曾根さん：西日本豪雨災害のとき、私は最寄り駅が壊れて、学校にいけない時期がありました。そのとき、いつも自分が当たり前に使っていたものがなくなっている状況の喪失感、恐ろしさ、怖さ、苦しさがこみ上げてきました。自分が体験したことを通して、いつも自分が当たり前で過ごしていたものが呆気なく壊れていくんだということ、それよりも恐ろしいことが原爆で起こったんだということが同時にこみ上げてきました。

Q. 絵を通じて、伝えたいことは



桂木晋作さん

桂木さん：人間の起こした戦争で、関係のない馬が巻き込まれてしまう。今、紛争などで、関係のない子どもたちが巻き込まれているという現状があるので、絵であれば海外の人にも伝わるので見ていただきたいですし、興味のない方にも、

近しいものとして感じてもらいたいです。

石田さん：絵を描く中で証言者の方から、「今まで人に言えず、初めて話したのがあなたなのよ」と、二人三脚で歩んできて、本当に家族同然のような関係になり、この教えてもらったことを発信していきたいです。

曾根さん：この活動だけで終わりがたくない。自分が今まで見たこと、聞いたことを一人でも多くの方に伝えたい、記憶を継承していきたいという気持ちがあります。だから、今の自分に何ができるのかを考え、自分なりの答えを出して、年をとっても伝えることができるように、いろんなことを聞いて学んで行動していきたいと思っています。

広島・長崎の原爆被害と非核・非戦法要

1945年8月6日、8時15分、広島上空600mで人類史上はじめての原子爆弾(ウラニウム爆弾)が炸裂し、一瞬にして半径2Km以内が爆風と熱線で破壊されました。多くの人々が被爆し、ごく短期間のうちに亡くなりました。

3日後の8月9日朝、長崎に2つ目の原爆(プルトニウム爆弾)が投下されました。たった一発の原爆が、広島では人口35万人のうち14万人、長崎では24万人のうち7万4000人の生命を奪いました。原爆死没者名簿には、広島で31万4118名(2018年8月6日現在)。長崎で17万9226名(同8月9日現在)が記載されています。

原爆の恐ろしさは殺傷力の強さのみならず、生命の根源的な回復力・再生力を奪い、遺伝子に対しても強い影響を与える点において、通常兵器とはまったく性質を別にしています。生きのびた人たちも放射線による原爆症に苦しみ、戦後は原爆症に対する差別という二重の重荷を背負って生きてきたのです。

広島・長崎で原爆にあった被爆者の中には朝鮮人・中国人などの人たちも含まれていることを忘れてはなりません。その人たちは生活の糧を求めて、あるいは徴用や強制連行で連れてこられ、軍需工場や軍関係の労務に従事させられていた朝鮮人・中国人でした。

焦土と化した長崎市内には、被爆後も引き取り手のない爆死者の遺体が放置されたままになっていました。憂慮した市内の僧侶や門徒、婦人会の方々は我が家の復興をさしおいて、放置された遺骨を約半年間に渡って一体一体収骨し、東本願寺長崎教会跡に建てられた仮納骨堂に納められました。その数は1万體とも2万體とも言われています。

1946年暮れに原子爆弾無縁者合同廟仮堂にて、長崎教区の僧侶、門徒約3000人が参集し、占領軍将校も招いて「原爆法要」をお勤めしました。

1999年、長崎教会前に完成した原子爆弾災死者収骨所に遺骨を移しました。その上に建立された「非核・非戦の碑」の前では、毎月9日に「非核・非戦定例法要」が、毎年8月9日には「非核・非戦法要」が勤められています。

一方広島において1982年3月2日、真宗大谷派広島別院で「非核・非戦の集い」(主催山陽教区)が開催されました。1981年、ローマ法王のヨハネ・パウロ2世が広島を訪問し、死者をいたみ、生き残った者を励まし、「原子地獄を繰り返すな」と訴えました。詩人の栗原貞子はそのことを「原子地獄の救済」という詩でとりあげ、安芸門徒が多いこの地に「被爆から35年京都から法主がおとずれて慰霊碑に向かったことを聞かない」と嘆きました。真宗大谷派山陽教区の仏青連盟はその問いかけに呼応し、同年8月29日に姫路市労働会館で「非核・非戦法要」を勤めました。以降、会場を広島別院に移して毎年勤められています。



東本願寺広島別院

被爆前は、広島城正面の広島市大手町六丁目にあったが、原爆投下によって全壊焼失した。1951(昭和26)年に、現在の場所(広島市中区宝町)に木造平屋建ての本堂が再建された。老朽化が進む中、宗祖親鸞聖人750回御遠忌を縁として、2014年に現在の別院の姿となった。



明泉寺の山門

山陽教区 明泉寺

爆風により本堂と庫裏は倒壊するも、山門と松の木と石造りの水瓶が残った。1972(昭和47)年から始まった段原地区の市街地再開発の区画整理のため、全て更地にするように広島市から要望があった。しかし、門徒住民の強い要望から、現在の位置に移設した。今なお被爆当時の姿が残されている。



記念講演：栗原貞子さん

「非核・非戦法要」にて
1981年8月29日 姫路労働会館



広島別院への寄贈絵画

広島別院に保管されている、増田勉さん(画家)が描かれた2枚の絵画。戦争への怒りや被害者としての悲しみ、加害者の罪責表白としての痛みを、抽象的な絵画に表現している。『同朋新聞』(1995<平成7>年8月号)の表紙に絵画が掲載され、同号にて増田さんのインタビュー記事も掲載されている。



被爆した石灯籠

東本願寺広島別院

広島別院の入口横にある石灯籠。原爆の閃光によって石造りの屋根が赤くただれている。



原爆死没者慰霊塔前で勤行

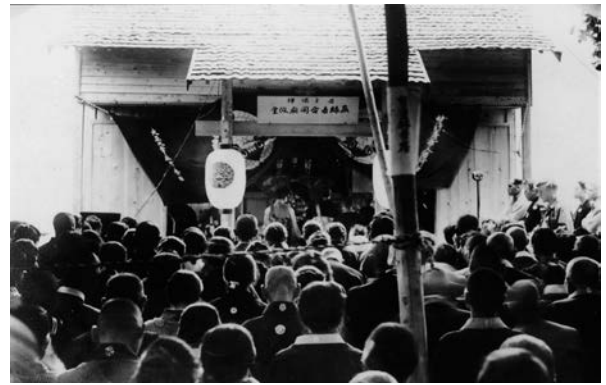
「非核・非戦の集い」 1982年3月2日
写真提供：個人(左右とも)



長崎教会仮御堂に安置された遺骨

写真提供：慶福寺

被爆後、長崎教区の人たちは、市内各地に放置された人々の遺骨を收拾して歩いた。26個の木箱に納めた遺骨は、東本願寺長崎教会跡に建てられた原子爆弾無縁者合同廟仮堂に安置した。



「原爆法要」

写真提供：慶福寺

原子爆弾無縁者合同廟仮堂に遺骨を安置して、1946（昭和21）年暮れ頃に「原爆法要」が勤められた。占領軍将校を招待し、教区内真宗門徒約3000人が参詣した。



浦上刑務支所 運動場跡

写真左

爆心地から250メートル北、現在の長崎平和公園の場所にあったが、壊滅し職員とその家族、収容者の134人全員が死亡した。収容者のうち、少なくとも46人以上が朝鮮人・韓国人だった。彼らは、強制連行先で抵抗した者、あるいは家族、同胞を飢えから救おうと食糧確保をしたことで「経済犯」に仕立てあげられた者であったと思われる。扇状の運動場は当時フェンスで囲われ、個々に運動させられた。死刑場は、平和公園にふさわしくないとして埋められ、整備された。



「非核・非戦の碑」前での勤行

1999年、長崎教会前に新たに造られた原子爆弾災死者収骨所前には、「非核・非戦の碑」が建てられた。



遺骨の移し変え作業

完成した原子爆弾災死者収骨所に遺骨を安置するにあたって、木箱から新たなアクリルの箱に移される遺骨。

聖人の仰せになきことを仰せとして

2019年は、日本の植民地からの解放と独立を訴えた「三・一独立運動」(1919年)から100年という記念の年を迎えています。大谷派と朝鮮半島にはどのような歴史があるのでしょうか。

1876(明治9)年、江華条約(日朝修好条規)は、朝鮮の開国や日本の一方的な領事裁判権を定めるなど、不平等な内容でした。大谷派の朝鮮開教は、この時に手にした釜山港居留地を拠点に始まります。1877年8月、外務卿寺島宗則、内務卿大久保利通の勧めを受けて大谷派は奥村円心に朝鮮出張を命じました。

奥村円心は、1585(天正13)年豊臣秀吉の「朝鮮出兵」の際に、釜山に高德寺を創設した奥村浄信の後裔であり、後に愛国婦人会の初代会長の奥村五百子の兄でした。

1877年11月、奥村円心らは釜山の旧対馬使の対面所を借用修築し、釜山布教所を開設。そこで在留居留民のための小学教育を開始、貧民救助、行路病者救護を目的とした「釜山教社」を創立、翌年に釜山別院と改称し奥村が初代輪番となりました。以後、元山(1881年)、仁川(1885年)、「京城(現ソウル)」(1890年)と次々に布教所を開設。1893年には京城領事館監獄教誨と京城守備隊への布教、翌年日清戦争がはじまると従軍布教を開始しています。

1910(明治43)年、日本は韓国を併合(韓国併合)し植民地としたことに伴い、大谷派は「満韓布教監督部」を「朝鮮布教監督部」とし、朝鮮半島における布教体制を強化しました。

1919(大正8)年3月1日、植民地支配からの解放を望む朝鮮の民衆が、「独立宣言」を発し、朝鮮独立万歳を叫ぶ示威運動は全国各地に波及しましたが、日本の軍・警察は武力でこれを鎮圧。「独立宣言」の起草にあたっては、韓国の仏教者の万海韓龍雲らも深くかかわっていました。一方、大谷派では元山布教所(現・元山市)から「三月一日元山里の市日にて多数の鮮人蟄集せるを機とし、各所に壇を設け、宣言書を配付して激越なる演説をなし、数千の群衆相和して万歳を連呼し、将に暴動を發せんとする形態」と報告がされています。また、同年6月には朝鮮開教使員に向けて、教化者として民心啓発をもって統一的努力に貢献し、統治の大業に資するようにと訓示しました。民族の独立と解放を願う声を「騒擾」としか認識できませんでした。日本の植民地支配は35年に及びました。戦後、朝鮮半島にあった大谷派の別院・寺院はすべてなくなっています。あらためて、朝鮮開教の意味が問われているように思われます。



マンヘ ハン・ヨンウン

万海 韓龍雲(1879～1944)

朝鮮の僧侶、詩人。本名は韓裕天。法名は龍雲、万海と号した。チンチンナムド忠清南道ホンソン洪城生まれ。

三・一独立運動(1919(大正8)年)に際し、宣言文の作成に仏教徒代表として参加した。法廷では誰よりも強靱に「独立は民族の自尊心」と語り、民族の自主独立の正当性を理路整然と説き明かした。

一方、著書の『朝鮮仏教維新論』で、「寺院の位置が山中ではいけない、都市でなければならない」と、仏教改革運動に生涯を捧げた。

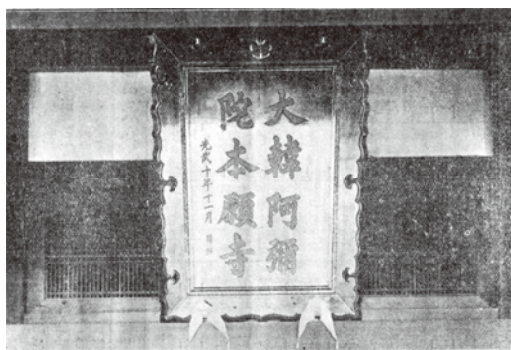
1910(明治43)年に韓龍雲・朴漢永パクハンヨンらにより創建された曹溪寺は、韓国仏教の歴史と伝統を代表する宗団である大韓仏教・曹溪宗の総本山として韓国仏教の中心としての役割を果たしている。



『東本願寺開教現勢一覽』

(朝鮮半島部分のみ)

1939(昭和14)年頃に朝鮮半島にあった大谷派の別院、布教所。■が別院、●が布教所、▲が予定地。

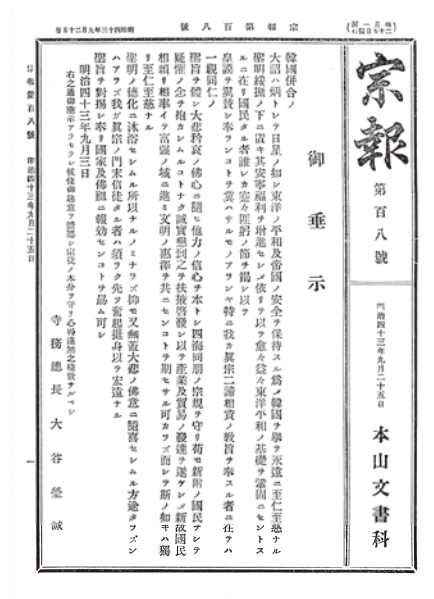


京城別院 大韓阿彌陀本願寺勅額

『宗報』1910(明治43)年8月

1910(明治43)年7月、大韓帝国皇帝より、「京城別院」に下賜された勅額。「京城」は現在のソウル。

同年7月12日に勅額奉安式が挙行された。韓国側からは韓国太皇帝の使いとして侍従除丙協、女官7名その他閑宮内大臣、金中樞院議長など10数名の高官が参列。日本側からは山縣副総監以下、通訳、仏教婦人法話会会員等三千数百人が参列した。8月の韓国併合を前に、民衆レベルの「親善」を印象づけた。



韓国併合に際し出された「垂示」

『宗報』第108号 1910(明治43)年9月25日発行

1910年8月22日の韓国併合に関する日韓条約調印を受け、その意義を僧侶や門徒に示した。韓国併合は、「東洋平和及び帝国の安全を保持」するためのものであり、新たに国民となった者たちと助けあい、天皇や国家の為に尽くすよう、宗徒の本分を守りの心得違いないようにと教えた。



三・一独立運動後、朝鮮開教使員へ訓示

『宗報』1919(大正8)年6月

三・一独立運動の後、朝鮮で活動する開教使に対し「移住民の教導」と「鮮民の感化」のため、各宗派協力して「統治の大業に資する」よう訓示した。

不 戦 決 議

私たちは過去において、大日本帝国の名の下に、世界の人々、とりわけアジア諸国の人たちに、言語に絶する惨禍をもたらし、佛法の名を借りて、将来ある青年たちを死地に赴かしめ、言いしれぬ苦難を強いたことを、深く懺悔するものであります。

この懺悔の思念を旨として、私たちは、人間のいのちを軽んじ、他を抹殺して愧じることのない、すべての戦闘行為を否定し、さらに賜った信心の智慧をもって、宗門が犯した罪責を検証し、これらの惨事を未然に防止する努力を惜しまないことを決意して、ここに「不戦の誓い」を表明するものであります。

さらに私たちは、かつて安穏なる世を願い、四海同朋への慈しみを説いたために、非国民とされ、宗門からさえ見捨てられた人々に対し、心からなる許しを乞うとともに、今日世界各地において不戦平和への願いに促されて、その実現に身を捧げておられるあらゆる心ある人々に、深甚の敬意を表するものであります。

私たちは、民族・言語・文化・宗教の違いを越えて、戦争を許さない、豊かで平和な国際社会の建設にむけて、すべての人々と歩みをともにすることを誓うものであります。

右、決議いたします。

1995年6月13日 真宗大谷派 宗議会議員一同

1995年6月15日 真宗大谷派 参議会議員一同

